

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：33901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01896

研究課題名(和文)近代日本青年の「南方」体験：中国人コミュニティとの接触の実像

研究課題名(英文)Travel Experience of Toa Dobun Shoin Students in South China and South East Asia

研究代表者

岩田 晋典 (Iwata, Shinsuke)

愛知大学・国際コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：10513278

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：研究の関心は東亜同文書院生が記した大量の調査旅行日誌「大旅行誌」のテキスト分析をとおして近代日本人青年と“アジア”の接触を浮き彫りにすることにあり、本プロジェクトでは、南方(華南から東南アジアに広がる一帯)に焦点を当てると同時に食や言語、観光などの経験相に注目して分析を進めた。

その結果、南方における「大旅行」の理解が飛躍的に進み、「大旅行」研究における地理的な偏りが是正されたほか、食料事情や言語状況、在留日本人社会、ツーリズム、都市表象など多様な観点から分析を進め、同研究の幅を拡大することができた。さらに、今後の同研究において取り組むべき喫緊の課題が明確になったのも大きな収穫であった。

研究成果の概要(英文)：As part of study in Toa Dobun Shoin's Great Journeys, month-long field researches in China and its surrounding regions conducted by the college students almost annually in the first half of the 20th century, our project examined its Southern routes in South China and South East Asia where little attention had been given.

Another originality of this project lies in analysis of the tours from diversified perspectives on meals, languages, local Japanese communities, tourism, etc., most of which had so far been ignored in spite of importance in the students' travel practices.

Overall, we were able to develop the study in Great Journeys substantially by achieving in correcting its regional imbalance and demonstrating various approaches to more specific and extensive understanding of their travel experiences.

研究分野：文化人類学・旅行文化論

キーワード：東亜同文書院 大旅行 大旅行誌 南方 旅行 フィールドワーク 華南 東南アジア

## 1. 研究開始当初の背景

東亜同文書院「大旅行」調査は、1907年から開始された卒業前の一大イベントであり、書院生数名で班を編成して数か月間、中国大陸を中心とする各地において調査を実施するものであった。

30 有余年にわたって 20 世紀前半の中国やその周辺を記録したコースの総数は 700 近くに及ぶ。その調査結果は、『中国調査旅行報告書』や『東亜同文書院大旅行誌』(以下「大旅行」調査報告書と一括)としてまとめられ、近代日本のアジア経験を知るための貴重な史料となっている。愛知大学には、文部科学省の平成 18 年度私立大学学術研究高度化推進事業(オープン・リサーチ・センター整備事業)のもと東亜同文書院大学記念センターが設立され、これらの史料の整理と研究が進められてきた。本研究で主要な調査対象とする史料はすでにこうした形で保存されたものである。

「大旅行」調査に関する研究は、設立時に同センター長も務めた藤田佳久愛知大学名誉教授を中心に進展してきたものであり、同センターに設けられた大旅行調査研究班によって、2013 年には国際シンポジウム「東亜同文書院・大旅行調査から見る近代アジア」が、また 2014 年 11 月には愛知大学車道校舎においてシンポジウム「書院生、アジアに行く! : 東亜同文書院・大旅行調査研究の新たな地平をめざして」が開催された。今回の研究チームは、4 名いずれも同センターの学内研究員を務めており、上記のシンポジウムで「南方」方面を担当して研究報告を行うべく討論を重ねてきたことも本研究着想のきっかけとなっている。

このように一定の領域では、「大旅行」調査の研究は着々と蓄積されつつあるが、その一方で先行研究を通して 2 つの課題が明らかになっている。すなわち、( ) 「大旅行」ルートの先行研究が満洲などの中国大陸北方に偏る点、( ) 個々の研究が独立的になされる傾向がある点である。

両課題を克服するために、北方とは異なる未着手の地域すなわち中国大陸南部から東南アジアまでの範囲 本研究で言う「南方」 に注目すること、研究分担者が専門性を活かし連携することによって「大旅行」を体系的に比較すること、という 2 つの必要性が浮上した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、近代における日本人青年と“アジア”の接触を浮き彫りにすることにあった。より具体的には、上述の 2 課題とその解決案に対応する形で以下の 2 つに目標を分けて、その達成を試みた。

(1) 「南方」を対象にした「大旅行」調査の実態解明

本研究で言う「南方」とは、広東省や海南

省、福建省、台湾島などからなる華南地方から東南アジアにまで及ぶ地域であり、「大旅行」調査が行われた範囲全体からすれば南半分に含まれる。これら「南方」への「大旅行」調査は、いまだ十分に論じられていない状況であった。

(2) 経験相をとおした「大旅行」体験の分析

第二の目的は「大旅行」の経験を食や言語、観光などのレベルに分け、各地域の「大旅行」を照らし合わせて考察することで、通地域間の比較を行うことである。

東亜同文書院の書院生は、上海という当時の東アジアにおける一大国際都市の日本人コミュニティを後にして、数々の中国人コミュニティと接触しながら、「南方」を旅していった。「大旅行」調査報告書では、書院生の多種多様な体験が生き生きと描写されている。そもそも「大旅行」とは書院生が卒業前に挙行した一大イベントであり、たとえ学術調査が本来的な目的であったとしても、その文脈だけで理解できるものではない。書院生は辛くも楽しくもある「大旅行」で様々なことに一喜一憂するのである。こうした等身大の視線で記述された書院生の生の体験を手掛かりに、対面的な状況の中に現出する中国人コミュニティへのまなざし、そしてそこに表れる“アジア”を多面的かつ総合的に理解することを目指した。

## 3. 研究の方法

本研究プロジェクトの分析対象は『大旅行誌』シリーズ(計 33 巻、総ページ数は約 16,700 ページ)である。

研究方法の中心となったのは、下記の研究実践の地道な繰り返しであった。すなわち第一に、膨大で重厚な『大旅行誌』シリーズから「南方」に該当する箇所を見出し、適宜複写・ファイル化するという史料整理の段階からはじまり、次にそれを読解・分析するという段階、第三に分析結果を論稿にまとめる段階、そして第四にこの一連の作業を各自が繰り返すことで「大旅行」調査の理解を相乗効果的に深めていくという段階である。

また、各自が研究に取り組む一方で定期的に研究会を開き、それぞれの研究成果を報告し、かつその知見を共有することにも力を入れた。

さらに、「大旅行」調査の実態をより詳細に理解するために、「大旅行」調査がどのように進められたのかを現場から理解するアプローチも取り入れた。すなわち、台湾、香港、ベトナムの 3 地域における共同フィールドワークである。

## 4. 研究成果

以下各年度の実績を述べた後、成果を総括したい。

#### (1) 平成27年度の実績

平成27年度の研究実績は以下の4項目に分けることができる。i)「大旅行」調査史料の整理作業、ii)それぞれの担当者による「南方」への調査の分析、iii)台湾における合同現地調査、iv)定期的な研究会の開催である。初年度は大きな一歩を踏み出すことが出来たと言える。

i)「大旅行」調査史料の整理作業：これは、愛知大学図書館所蔵の『大旅行誌』シリーズのうち、分析対象となる箇所を特定し、その上で複写・ファイル化するというものである。分析の初期段階として不可欠の作業をおおむね完了できたことは大きな意味を持った。ii)「南方」方面の各「大旅行」調査の分析：岩田/台湾、加納/東南アジア、須川/中国大陸内陸部、塩山/香港という分担にもとづき、各担当者が個別に研究を進めた。iii)台湾における現地調査：研究分担者4名それぞれの専門領域にもとづく比較分析を目的に、平成27年度は台湾に焦点を当て、2月に共同で現地調査を行った。iv)定期的な研究会の開催：以上の作業を行うために、研究会を春学期2回・秋学期3回(うち1回は東亜同文書院研究センターとの共催)開催し、進捗状況を相互確認するとともに、その時点での分析結果の共有に努めた。

#### (2) 平成28年度の実績

次年度に当たる平成28年度の研究実績は以下の5項目に分けることができる。i)前年度の研究の成果発表、ii)各担当者による調査分析、iii)定期的な研究会の開催、iv)香港における合同現地調査、v)新たな研究課題の認識と着手である。

i)前年度の成果発表：担当者各自が論考を発表しただけではなく、研究分担者の一人である加納寛が編者となって本研究の成果を『書院生、アジアを行く！：東亜同文書院性が見た20世紀前半のアジア』(あるむ)として刊行することができた。また、中国・大連理工大学の国際シンポジウム(6月)やフィリピン・セブ島のJSA-ASEAN国際学会(12月)などの会合で研究成果を発表した。さらに、2月には愛知大学にてシンポジウム『100年前のアジア旅行：東亜同文書院「大旅行」と近代日本青年』を開催した。

ii)各研究分担者による「南方」方面調査の分析：それぞれの地域や分野について分担者が研究を進めた。

iii)定期的な研究会の開催：共同研究を効率良く進めるために、春学期2回・秋学期2回の研究会を開催し、進捗状況を相互確認するとともに、調査結果の共有に努めた。

iv)香港における現地調査：研究分担者4名それぞれの専門領域にもとづく比較分析を目的に、3月に共同で現地調査を行った。

v)新たな研究課題の認識との着手：こうした研究を進める中で、「南方」方面への「大

旅行」調査について複数の研究課題(GISを用いた旅行ルートの地図化やキーワードのデータベース化)を認識し、着手することができた。

#### (3) 平成29年度の実績

最終年度に当たる平成29年度の研究実績は以下の4項目に分けることができる。すなわち、i)各研究分担者による調査分析と成果発表、ii)定期的な研究会の開催、iii)ベトナムにおける現地調査、iv)新たな研究プロジェクトの準備である。

i)各研究分担者による調査分析と成果発表：それぞれの地域や分野について分担者が分析(史料のみならず現地の調査も含む)を行い、研究を進めた。

ii)定期的な研究会の開催：共同研究を効率良く進めるために、春学期2回・秋学期2回の研究会を開催し、進捗状況を相互確認するとともに、調査結果の共有に努めたほか、「大旅行」研究そのものに具わる問題点をあぶり出し、今後の研究の可能性について議論を深めることできた。

iii)ベトナムにおける現地調査：研究分担者3名の共同で、3月にベトナムで現地調査を行った。調査の成果は、平成30年度中に論稿として発表する予定である。

iv)新たな研究プロジェクトの準備：以上の研究を進める過程で、本科研プロジェクトの意義のみならず課題も共有することができたのは大きな収穫であった。研究分担者間の共通認識は、本プロジェクトの問題意識・基本的アプローチを維持しつつ、研究インフラをいっそう充実化し、それをつうじて「大旅行」に記されたアジア経験の解明を進めていく必要があるというものである。

#### (4) 成果の総括

本研究の目的、すなわち「南方」を対象にした「大旅行」調査を食や言語、観光といった経験相から分析することはかなりの程度達成できたと言える。とくに「南方」への「大旅行」調査に考察を加えることをとおして、近代日本人青年と“アジア”の接触を浮き彫りにするという大きな目的に対して少なからぬ貢献ができたと考えている。

たとえば台湾(書院生が訪れた帝国日本)、香港(「南方」の一大ハブ)、ベトナム(東南アジアに南下するための“出入り口”)に焦点を当て、食料事情や言語状況、在留日本人社会、ツーリズム、植民地観、都市表象など多様な観点から分析を進めることによって、「大旅行」調査における「南方」の位置づけや重要性を明らかにし、さらに従来看過されてきた感が否めない書院生の旅行実践について理解を深めることができた。

また、「大旅行」調査の研究において今後第一に取り組むべき課題、進むべき方向性が明らかになったことも大きな成果として記しておきたい。「大旅行」調査の研究では『大

旅行誌』シリーズの分析がカギとなることは当然であるが、その膨大な量のテキストを分析するための研究基盤は前時代的な状態に留まっていると言わざるを得ない。簡潔に言えば、アナログ的にしか利用できない史料群のデジタル化が喫緊の課題だということである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 19件)

加納寛「東亜同文書院生の香港観察にみる「アジア主義」：対イギリス認識を中心に」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』第40号、23-36頁(2018)査読無

塩山正純「『大旅行誌』の思い出に記された香港：昭和期の記述より」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』第40号、37-64頁(2018)査読無

須川妙子「原著『東亜同文書院大旅行誌』の食の記述にみる近代日本青年のアジア観：台湾・香港の比較から見えること」食生活研究会『食生活研究』第38巻2号、88-96頁、(2018)査読有

須川妙子「『東亜同文書院大旅行誌』の食の記述にみる近代日本青年のアジア観：香港の例」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』第40号、65-70頁(2018)査読無

岩田晋典「東亜同文書院大旅行とツーリズム：台湾訪問の例を中心に」張学昕・梁海・黄英哲・松岡正子編『歴史と記憶：文学と記録の起点を考える(愛知大学国研叢書)』あるむ、265-288頁(2017)査読無

岩田晋典「大調査旅行における書院生の台湾経験：“近代帝国”を確認する営み」加納寛編『東亜同文書院生、アジアを行く!!』あるむ、219-249頁(2017)査読無

岩田晋典「東亜同文書院生の植民地観と台湾：『大旅行誌』における植民地主義言説に関する試論」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』第38号、57-75頁(2017)査読無

岩田晋典「東亜同文書院生が見たパリ：優雅さ、退廃、そして近代性」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』第39号、53-68頁(2017)査読無

加納寛「書院生、東南アジアを行く!!：東亜同文書院生が見た在留日本人」加納寛編『東亜同文書院生、アジアを行く!!』あるむ、167-186頁(2017)査読無

加納寛「東亜同文書院生の台湾旅行にみる神社の位置付け」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』第38号、103-114頁(2017)査読無

塩山正純「『大旅行誌』にみる書院生の「ことば」へのまなざし：大正期以前の記述より」張学昕・梁海・黄英哲・松岡正子編『歴史と

記憶：文学と記録の起点を考える(愛知大学国研叢書)』あるむ、245-264頁(2017)査読無

塩山正純「『大旅行誌』の思い出に記された香港 大正期の記述を中心に」加納寛編『書院生、アジアを行く!! 東亜同文書院生が見た20世紀前半のアジア』あるむ、151-166頁(2017)査読無

塩山正純「東亜同文書院生の台湾旅行にみる「台北」像」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』第38号、77-102頁(2017)査読無

須川妙子「『大旅行誌』の食記述にみる書院生の心情変化：『雲南ルート』選択の意義を探る」加納寛編『東亜同文書院生、アジアを行く!!』あるむ、137-149頁(2017)査読無

須川妙子「『東亜同文書院大旅行誌』の食の記述にみる近代日本青年のアジア観」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』第38号、49-55頁(2017)査読無

岩田晋典「昭和期台湾への大旅行調査と観光 第29期生第21班の「南華・台湾への旅」の例」愛知大学東亜同文書院大学記念センター『同文書院記念報』第24号、105-117頁(2016)査読無

岩田晋典「東亜同文書院大旅行調査と植民地台湾」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』第34号、61-76頁(2015)査読無

岩田晋典「東亜同文書院大旅行調査における台湾訪問ルート」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』第35号、87-97頁(2015)査読無

加納寛「従「大東亜」戦争時期日本的泰語宣伝雑誌看「戦後」」謝政論他編『何謂戦後：亜州的1945年及其之後』台北：允晨文化、171-193頁(2015)査読無

[学会発表](計 3件)

岩田晋典 "The Great Journeys of Toa Dobun Shoin College and Its Routes", 5th Bi-Annual International Conference of the JSA-ASEAN, Cebu, Philippines (2017) 査読有

須川妙子「『東亜同文書院大旅行誌』の食の記述にみる近代青年のアジア観 香港の例を中心に」日本調理科学会(2017)査読有

須川妙子「『東亜同文書院大旅行誌』の食の記述にみる近代日本青年のアジア観」日本調理科学会平成28年度大会(2016)査読有

[図書](計 1件)

加納寛(編著)『書院生、アジアを行く：東亜同文書院生が見た20世紀前半のアジア』あるむ、全273頁(2017)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

岩田 晋典 (IWATA, Shinsuke)

愛知大学・国際コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：10513278

(2)研究分担者

塩山 正純 (SHIOYAMA, Masazumi)

愛知大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：10329592

加納 寛 (KANO, Hiroshi)

愛知大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：30308712

須川 妙子 (SUGAWA, Taeko)

愛知大学・短期大学部・教授

研究者番号：40342125